

【氏名】 酒井朋子

【所属大学院】 京都大学大学院農学研究科

【研究題目】

北アイルランド紛争における大戦戦没者慰霊のありようについての社会史・社会人類学的研究

【研究の目的】

1920年代にアイルランド南部26州と分割され、イギリス連合王国統治下に残った北アイルランドでは、アイルランド系／イギリス系、カトリック／プロテスタントと区分される二つの民族グループのあいだで熾烈な抗争が繰り返されてきた。

本研究は、この北アイルランド社会について、過去の戦争とりわけ両世界大戦を想起し戦死者を慰霊する営みが、60年代以降の紛争に及ぼしてきた影響を明らかにしたものである。大戦ではプロテスタントとカトリック双方の住民がイギリス軍へと従軍したにもかかわらず、その記念がカトリック住民に対するプロテスタント・デモンストレーションとして確立した経緯とはいかなるものであったのか。また、過去の戦争の戦没者を想起しようとする行いは、現前に進行する抗争へのスタンスといかなる関わりを有しているのだろうか。本研究はこうした課題に応えるために、北アイルランド社会における戦死者慰霊行事の形成過程を追うとともに、現在における戦死者の想起のありかたを調査し、考察を行ったものである。

【研究の内容・方法】

まず、戦死者慰霊行事の形成過程を、歴史資料を通じて分析した。主に用いた資料は第一次大戦前後の新聞である。また、大戦記念や戦死者表象と紛争との関連を分析するために、紛争激化以降の時期の新聞資料や政治パンフレットを参照した。プロテスタント社会において大戦や戦死者に付与された意味の多様性と、その多様性の背景にある社会条件との関連を調べるために、センサスなどの統計資料も用いた。さらに、北アイルランドで現地調査を行い、慰霊行事や慰霊碑および街頭で見られる政治的ディスプレイなど、戦死者を記憶にとどめようとする営みを観察調査するとともに、地元住民に聞き取り調査を行った。ベルファストの大戦記念博物館への訪問調査も行った。

なお、当初の予定では2004年秋に現地調査を行う予定であったが、これを2005年初夏に変更した。その主な理由は、ヨーロッパで広く世界大戦記念が行われる11月（第一次大戦の終戦記念日がある）よりも、むしろ6月前後に慰霊の営みが活発化することが、調査を進めていくうちにわかってきたためである。

具体的な実施経過としては、2004年の8月から12月には戦死者慰霊行事の形成過程や変遷の様子を分析した。なお2004年8月末から9月はじめにかけて、関連資料を所蔵する北海道大学図書館で資料の閲覧と複写を行っている。2005年の5・6月には現地調査を行った。このさい、北アイルランド第一・第二の都市であるベルファストとデリーでフィールド調査を行ったほか、イギリスのロンドンとアイルランド共和国のダブリンに滞在し、図書館や公文書館で関連資料を閲覧・複写した。帰国後は、現地調査で得たデータの考察に従事した。

【結論・考察】

以上の調査結果をまとめると、まず、第一次大戦の半ばからすでに、戦死者慰霊行事は当時プロテスタントの宗派行事として北部アイルランドで毎年7月に行われていた名誉革命記念と複合しながら形

成されていった。これは 1916 年 7 月にはじまる会戦で北部アイルランド出身のプロテスタント兵が数多く命を落としたためである。双方の記念行事は、一見政治性の低そうな「文化的・宗教的な行事」としてのありかたをもって、今日も多く多くの住民の参加するところとなっている。しかしその一方で都市部のプロテスタント居住区では、大戦戦死者の慰霊碑がアイルランド民族主義組織（IRA など）との抗争での死者をともに慰霊するものとして多数建設されており、これらの慰霊碑は「イギリス系プロテスタント」の縄張りをマーキングする記号として存在しているのである。このように、大戦戦死者を慰霊し想起する営みは、北アイルランドにおいてはプロテスタント＝イギリス派、カトリック＝アイルランド派という二項対立をたえず固定化する装置の一つとして機能してきたといえる。

今回の研究においては、歴史的出来事の記念への着目をつうじて、分断された社会構造のなかに人々を組み込んでいく力の働きを考察した。しかし同時に、この紛争社会に生きる個人個人がいかように私的経験とのかかわりのなかで歴史や自身の出自をとらえているのかが検討される必要がある。今後とりくむべき課題としたい。